# 夢を乗せた乗り物

御油小・5　徳重　縁思

「次は、市役所前。」

ぼくは、このしゅん間を待っていた。車内にひびきわたるアナウンスを聞いて、だれよりも先にボタンをおす。ぼくは、サッカーが上手くなりたくて、今年の夏から習いごとを増やした。一人で路面電車に乗って通っている。

ぼくには、やりたいことがある。ぼくより三つ上の兄が通っているサッカーのクラブチームに入りたいのだ。兄の通っているチームはポーランドへ遠せいに行く。ポーランドまでは飛行機で十七時間くらいかかるそうだ。ぼくも、ポーランドでサッカーがやってみたい。

ぼくは、足がおそい。ユーチューブでみとま選手、メッシ選手、ロナウド選手の動画をたくさん見ても、同じように速く動けない。そんなとき、いとこから体幹教室に通おうと誘われた。兄は一人でもトレーニングができるが、ぼくはできない。一人ではできないが、体幹をきたえて強くなりたい。ぼくは、体幹教室に通うことを決めた。しかし、通うにあたって、お父さんとお母さんから一つ約束が出された。それは、自分一人で名鉄に乗って豊橋駅に行き、さらに豊橋駅から路面電車に乗って習いごとの場所まで行くということだ。

初めての練習の日、お父さんが一緒について来てくれた。まず、国府駅でマナカを買った。マナカを手にしたとき、ぼくは少し大人になった気がした。先にお父さんがマナカを使って改札を通ると、ピッと音が鳴った。その後にぼくが通ると、ピヨピヨとヒヨコの鳴き声がした。どうやら、子ども料金の子が通るときは音がちがうようだ。まだまだぼくは、子どもらしい。

これまでも名鉄に乗ったことはあるが、今度からは一人で乗らないといけないため、

「三番線でいいの。」

「特急と急行なら豊橋に着くんだよね。」

と、お父さんにいろいろなことを確認した。

午後六時九分、三番線ホームに赤色の急行豊橋行きの名鉄が着いた。車両からは、サラリーマンや学生が降りてきた。この時間に乗る人は少ないようだ。ぼくは、景色が見える席を選んだ。

「景色を見ていれば、豊橋駅に着くのが分かるよね。」

「川は二つこえるんだよね。」

と、確認した。いつもならけい帯を見ていて景色は見ないが、今日はちがう。しっかり景色を見て、記憶しておかないといけない。

豊橋駅に着いた。終点だからみんな降りる。ぼくも人の流れに乗って改札まで行った。改札で、ピヨピヨの音をまた聞いた。ちゃんと反応してくれた証こだ。改札を出たら、お父さんに路面電車の乗り場まで連れて行ってもらった。豊橋市に路面電車が走っていることは知っていたが、乗るのは初めてだ。乗り場に着いたが、あれ。改札がない。

「とう着したら分かるぞ。」

と、お父さんが言った。

午後六時二十五分、路面電車が着いた。ドアが開くと、入り口に

改札と同じ、マナカをタッチする機械があった。こういうことか。ここでもぼくは景色の見える席に座った。目的地の市役所前駅で降りるために景色を覚えた。

「駅前大通、新川、札木。」

と、アナウンスが聞こえた。お父さんから、

「札木の次が市役所前だから、アナウンスが聞こえたら、降りるボタンを一番におすんだぞ。」

と、教えてもらった。どうやら降りるボタンをおさないと路面電車はとまってくれないらしい。すると、

「次は市役所前。」

と、アナウンスが聞こえた。お父さんに確認しながらぼくはボタンをおした。ボタンは赤く光り、「とまります」と表示された。ここで降りたのは、ぼくとお父さんだけだった。ぼくたちのためだけに路面電車がとまってくれた。なんだか特別な感じがした。市役所前駅を降りて、あと少し歩くと習いごとの場所にとう着だ。一回練習したおかげで、次からは一人でも大丈夫な気がした。

次の練習の日、勇気を出して一人で行った。出発するとき、お父さんとお母さんが見送ってくれた。ちょっとさみしくなったが、約束したのだからとがんばる気持ちをふるい立たせた。電車に乗っている他のお客さんが、みんなぼくを見ているような気がした。ぼくは、間ちがえないようにときん張していたため、ずっとドアの前で立っていた。

「着いた。一人で来れた。」

ぼくが乗る路面電車は、サッカーがうまくなりたいという夢を乗せて走ってくれている。兄が乗る飛行機にもサッカーがうまくなりたいという夢が乗っている。乗り物は、夢を乗せて走っているのだ。

お父さんとお母さんは、一人で電車に乗るぼくのために、けい帯を持たせてくれた。しかし、ぼくは電車に乗っているときにけい帯をさわっていない。景色をながめ、ボタンを一番におすしゅん間を、きんちょうしながら待っている。

6・9